

## ビジョン検討にあたっての主な論点について議論した結果の整理

ビジョン検討にあたっての主な論点1.、2.、3.の議論で出た意見について、意見を各項に振り分けなおし、共通するテーマやビジョンの骨格・構成に関する事項ごとに整理した（再掲あり）。

※黒字：平成29年度第1回検討会での意見

※青字：平成27年度業務での有識者及び島内関係者へのヒアリングでの意見

※緑字：柴崎委員からいただいたコメント

※橙字：平成29年度第2回検討会と現地視察での意見

### 1. 前提となる考え方について

#### 1. (1) 伝統的な自然観・人と自然との関わり に関する意見

<<山の神、岳参り>>

(岳参り)

- 昔は山頂は神聖な場所だった。神聖な場所であるため、選ばれた人だけが（手足を洗い、裸足で下の川から）山頂に行った。【大山】
- 沖ノ島のように見ることができない場所があってもいい。それも魅力となる場合もある。【大山】
- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。極端な例として、50年後には山頂部は立入禁止にする。それまでの間、人数制限や履き物の規制をかけながら山のあり方を作っていくべきか。【大山】
- 原集落の岳参りでも、早朝海辺で体を清め、水を汲んで山頂まで上がる。（山頂は？）母なる聖地と聞かされた。しかし、山を利用して生計を立てている林業関係者はたくさんいた。【岩川】
- 山に入るといことはむしろ地元の人はいないのかとも思う。親の時代には、山に入るのは営林署が主で、それ以外の人はいないこともなかった。安房だと、岳参りのときに集落の人と太忠岳とかに登った。そんなにしょっちゅう入る習慣はなかった【泊】
- 祠がそれぞれの集落や地域の方々の信仰の対象となっているという実態がある。これが昔から日本の山にはあって、それが今も続いているということを改めて感じたことが非常に重要【土屋】
- そこに祭られている島民と山、祠との関わりを残していかないといけない。しかしそれを大々的に広めるかどうかは考えていかなければいけない【柴崎】

(山の神)

- 我々の子どもの頃は、むやみに山に入るといけないとおしかりを受けた。屋久島では山の神が一番偉いということが言われていることに由来。【岩川】

(その他)

- 自分の住む地域の森林を大切にすることが醸成されていることは、他地域にはない特徴
- 歴史的経緯を踏まえ現在の場所の成り立ちを考えると、岳参りでトコロガンが願掛け・願解きを行ってきた場所は「聖地」として守られるべきであり、特に奥岳の峰々の「聖地」性を壊してはならない。安易に人数を増やすような施設整備などは極力控えることが重要。また、原生的かつ「聖なる空間」を体験できるよう配慮が必要【柴崎】
- 日本各地で山岳信仰が廃れていく中、岳参りという風習が残ってきた事実は非常に貴重。これを「屋久島の誇るべきモノサシ」として活かすべき【柴崎】

### <<節度、感謝・遠慮の心>>

- 山の神を信仰することは、山を使わない（入らない）ことではない。山の神を大切にし、山を大切に思いながら使わせていただく（入らせていただく）という考え方である。【中川】
- 山から恵みをいただく場合、感謝の気持ち、節度を持って使わせていただくという気持ちが重要である。【中川】
- 利用と信仰は相反するというより、信仰しながら利用するということで、いつも一緒にあるべきものとする。【中川】
- 感謝の気持ちを持つことで素晴らしいビジョンができてくるのではないかと。山に入る人には、山に感謝し遠慮の心をもって入っていただきたい。【岩川】

### <<畏れ>>

- 単に楽しみにくるだけでなく、山に対して畏れをいだくという部分もあってよい。
- 屋久島の山は近代技術をもって解決できるほど甘い環境ではない。こうした場所では「心（畏敬）をもって取り組むような対応が重要。【柴崎】

### <<利用するエリアとしないエリア>>

- 山の神を信仰することは、山を使わない（入らない）ことではない。山の神を大切にし、山を大切に思いながら使わせていただく（入らせていただく）という考え方である。【中川】
- 沖ノ島では世界遺産登録をきっかけに入島禁止の検討をしているが、屋久島でもそのような場所があってもいいのではないかと。人を受け入れる場所とそうでない場所を明確に線引きし、皆で同じ認識を持つことが重要。【佐藤】

## 1. (2) 自然環境を損なわない範囲、方法での利用 に関する意見

### <<利用するエリアとしないエリア>>

- 沖ノ島のように見ることができない場所があってもいい。それも魅力となる場合もある。  
【大山】
- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。極端な例として、50年後には山頂部は立入禁止にする。それまでの間、人数制限や履き物の規制をかけながら山のあり方を作っていくべきか。【大山】
- 山頂部への立入禁止は厳しいが、闇雲に入るのはよくないことは同感する。【古賀】
- ネット上で情報が流布し、行ってしまふ/行けてしまふ神聖な岳参りの道について、利用するのか、制限するのか、中間をとるのかの方向性について明確になればよい。【古賀】
- 沖ノ島では世界遺産登録をきっかけに入島禁止の検討をしているが、屋久島でもそのような場所があってもいいのではないかと考える。人を受け入れる場所とそうでない場所を明確に線引きし、皆で同じ認識を持つことが重要。【佐藤】
- 整備する登山道はきちんと整備し、危険な場所などは使わないとしていくのであれば、使う所はどのような利用にしていくのかを検討すべき。【吉田】

### <<屋久島が日本・世界に果たす役割・機能>>

(日本・世界の見本となる)

- 日本最初の世界自然遺産である屋久島だからこそ、見本となる自然と人との付き合い方ができるのではないかと考える。【大山】

(環境学習の道場)

- 環境文化村構想では、屋久島環境文化村を「環境学習の道場」という位置づけで考えていた。屋久島は環境学習の道場になりうる内容と条件を持っているので、このように考えれば、ある程度利用の仕方が見えてくるのではないかと考える。【大山】
- ガイドは、屋久島の魅力を伝え、環境学習の指導者にもなりうる。【大山】
- 屋久島の山には教育的な価値が多分にある。例えば、し尿担ぎは環境に配慮した行為であることとして捉える利用者は多いと考える。し尿担ぎのボランティアを募れば、島外から参加者が出てくると思われる。【柴崎】

## 1. (3) 屋久島山岳部の価値、魅力、らしさ に関する意見

### <<ビジョンの作り方(役割)>>

(ビジョン検討の意義)

- このようなビジョン作りそのものが、屋久島の魅力とは何かという意識を作り上げるきっかけになればよい。【日下田】

- 屋久島の価値は多様な自然の相互関係や人間行為と重層化して存在している。このため屋久島の特徴をなす要素や、その価値は並列的に存在するのではなく、循環的体系をなしているという認識がビジョン検討の前提として必要と思える。【日下田】

(ビジョンの対象範囲)

- 来島者などから、屋久島で生まれ育った自分では感じられない島の魅力（風、水など）を知ることができた。里の部分も含めて議論するならば、「屋久島まるごとビジョン」としてもいいのでは。【岩川】
- 行政は地域住民がいかに活性化するか、集落が活性化するかという論点で計画を作っているので、島全体を軸として計画を作って実行していく。色々なビジョン作る時にはやはり島全体（口永良部島も含めて）として考えていきたい【矢野】

(一言フレーズの作成)

- 成果品としても、文章の冒頭には「この成果品は、どのような性格で、どのように役に立つのか」を一般の人にもわかりやすい表現で、冒頭に記しておくとう理解しやすくなる。【日下田】

(新たな「モノサシ」作り)

- 現代的な視点からさらに価値を上げる努力も必要。屋久島の新たな「モノサシ」を作って、それを世界に発信した方が長期的に価値がある。これからは屋久島の「モノサシ」を世界に発信する時代だと考える。【柴崎】

## <<価値・魅力・らしさ>>

(2つの価値)

- 屋久島は、自然そのものの価値と、人と自然とが関わってきたことが評価されてしかるべき。それに見合った管理・運営の体制が整えられることが理想。【日下田】

(恵みと厳しさ)

- 「時に自然の大いなる恵みを感じ、時に自然の厳しさを知る」これが屋久島の価値ではないか。【柴崎】

(海・山・川一体、まるごと)

- らしさについて考える時、海・川を省くことはできない。海・山・川が一体となって屋久島の魅力がある。議論でもこの部分に留意して行う必要。【荒田】
- 屋久島の魅力を伝えるのは非常に難しく、屋久島を一体化して魅力を伝えることになる。【日下田】

■屋久島の魅力は「まるごと」だと思う。言葉や目に見える形でらしさを作り上げるのは短い時間では難しい。【伊熊】

■山岳部以外のいわゆる里の観光地もある

■環境文化村構想で「共生と循環」という言葉があるように、島であるが故に循環的体系を踏まえておくことが重要と思える。【日下田】

(奥岳の魅力)

■奥岳の魅力は、屋久島の魅力（岩、水、緑、自然の厳しさ）など全てが詰まった場所であり、それが「聖地」を構成する要素にもなっている【柴崎】

■奥岳の一番核心的な部分は何度行っても素晴らしい空間と改めて実感。人工物もあまりなく、とりわけ岩がごつごつした特異的な空間【柴崎】

■今回は悪天候に見舞われることはなかったが、雨が降ったときには全く逆の顔を見せる。そういうことを感じさせる空間は維持しなければいけない【柴崎】

(自然、景観、利用体験のすばらしさ)

■屋久島の自然、景観、レクリエーション、登山体験そういうもののすばらしさ、奥深さを改めて認識【土屋】

■屋久島山岳部の自然、特に奥岳の自然のすばらしさ、世界の中で誇れるもの、これを後世に伝えていかなければいけないという気持ちを改めて思った。奥深い自然体験ができる場所としても、日本国内でももちろんすばらしい有数のものであり、世界にも誇れる【吉田】

(のんびりした時間)

■現在の屋久島観光は、縄文杉登山など時間に追われるが、のんびりした時間を過ごせる島でもある。【吉田】

(他地域との比較)

■奄美との比較では、屋久島は観察対象に縄文杉のようなはっきりしたスーパースターがあり、植物の魅力が動物より大きい。【長田】

■屋久島は花崗岩が地中で固まった後に急上昇してできた山であるために標高差が大きくなり、雨が山肌にしみこまず河川まで流れるため山頂部に大きな岩が見える景観になっている。また、標高差があるために植生の垂直分布が見られる。【吉田】

■他の山と比較すると「瑞々しいみどりみどりした山」であり、その緑は淡い黄色（落葉樹の新緑）から深い緑（常緑樹）までいろいろあることが特徴【柴崎】

■里のすぐ近くに一級の溪谷や沢があちこちにある。いたるところで沢水が流れることが特徴【柴崎】

- 地元でごみを減らす運動に取り組んだことにより、屋久島の山ではゴミを捨てないということが皆の中に意識付けられた。ゴミがないところには観光客もゴミを捨てないことに波及している。他の地域では真似できない屋久島の隠れた魅力【大山、土屋】

#### (原始性)

- ほぼ手つかずであることから原始性、原生性、神秘性を感じるころ
- 切り株があるところを「原始」とするには難しいが、人の手が入った森でも「原生」を感じることはできる。
- 花山歩道の魅力は原生性であり、それを確実に保ちつつ利用を進めることが重要。利用をコントロールし、制限の中で利用を進めていく仕組みを作ることが非常に重要【土屋】
- 花山歩道のような原始的な場所でも、以前と比べると少し変化が起き始めているような気がしている。色々な利用のやり方、管理のあり方に今後考えるべき点があるのではないか【柴崎】

#### (景観)

- 人工物のない解放感のある展望（注：宮之浦岳など山頂部から展望した場合、登山道以外に人工物はほとんど見えない）
- 特徴的な地形がもたらす景観
- 岩の荘厳さにも価値がある。花崗岩が天からまかれたような風景は、屋久島の幻想的な空間の重要な構成要素【柴崎】

#### (自然観・人と森の関わり)

- 自分の住む地域の森林を大切にすることが醸成されていることは、他地域にはない特徴
- 森と共に生活があったこと

#### (水環境)

- 他地域のように山岳部に生息する動物からの影響が少ないため、登山道のどこでも水が飲める。屋久島は「水」のイメージ
- 屋久島憲章でも述べられているように「どこでも、いつでも、おいしい水が飲めること」【柴崎】
- 里のすぐ近くに一級の溪谷や沢があちこちにある。水を通じた美しさ（時に怖さ）はもっと伝えられてよい。【柴崎】
- 水は、森や川をつくり、時には土壌侵食して花崗岩がむき出しになるかもしれない。屋久島憲章にあるように、いつでもどこでもおいしい水が飲めるという「水」は屋久島を構成する根源【柴崎】

■屋久島を構成する根源はやはり水にあるのかと思う。屋久島憲章で言われたような、いつでもどこでもおいしい水が飲めるという水に対するリスペクト、山に対するリスペクトが大事【柴崎】

■山の水を汲む場所の水の太さに感動した【羽井佐】

(多様な利用形態の幅がある)

■原始的な場所から都市的(少し開けた)場所まで、様々なレベルですごいものがある【柴崎】

- ・人智を超えるような、広大な空間が広がって岩もごつごつしていたり、神聖な気持ちになるような場所(宮之浦岳)
- ・素晴らしい森が広がっている場所(花山、ヤクスギランドや白谷雲水峡も)
- ・巨木や軌道、人との関わりがよく分かるような場所(縄文杉)
- ・里の近くでもすばらしい川や滝がある(宮之浦川、安房川、大川の滝、千尋の滝)

### <<屋久島の魅力の伝え方>>

(縄文杉登山)

■良くも悪くも、縄文杉登山は屋久島に行きたいという人の入口となっている。縄文杉登山をきっかけに、より深い屋久島の魅力を伝えることにつながる案内ができるのではないか。【古賀】

(情報発信)

■屋久島には色々なもの(魅力)があるが、発信が下手なのかもしれない。行政が主導で情報発信の基礎を構築し、効果的に発信していく役目はガイドにあると考える。【伊熊】

■縄文杉と白谷雲水峡の魅力が突出している。その他の魅力を伝えるのは大変。今後はインバウンドを含めた中でのビジョン等作成となるが、屋久島は環境としてはとてもいいものがたくさんあり、ストーリー性を全面に出していく必要。【後藤】

■屋久島憲章では水を取りあげている。水の豊かさでストーリーが考えられるのではないか。【大山】

■現代的な視点からさらに価値を上げる努力も必要。屋久島の新たな「モノサシ」を作って、それを世界に発信した方が長期的に価値が上がる。これからは屋久島の「モノサシ」を世界に発信する時代だと考える。【柴崎】

### <<山岳部や登山以外の魅力>>

(山岳部以外の魅力向上)

■世界遺産登録エリアは山岳部にあるが、今後は、団塊世代以降の体力低下などで山頂まで行かない利用も出てくることが考えられる。里巡りツアーなどで屋久島の魅力を高め



ていく必要。【吉田】

(多様な魅力の発信)

- また、縄文杉登山者があまりじっくり見ていない、過去の林業など人と森との関わりなども魅力になっていくと思われ、自然だけでない多様な魅力を伝えていくべき。【吉田】

## 2. 屋久島山岳部の保護と利用の「目指す姿」/「あるべき姿」に関する意見

### <<ビジョンの作り方(構成)>>

(未来像を描く)

- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。【大山】

(一言フレーズの作成)

- 成果品としても、文章の冒頭には「この成果品は、どのような性格で、どのように役に立つのか」を一般の人にもわかりやすい表現で、冒頭に記しておくとう理解しやすくなる。【日下田】

### <<目標像の設定>>

- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。【大山】
- あるべき姿を考える時、どの時点の姿を屋久島のありべき姿とするか考える必要がある。【古賀】
- いつの時代に戻るか考えることは非常に難しい。これから将来50年先がどのような時代になっていくのかを考えながら決めるべき。【吉田】

### <<次世代への継承>>

- あるべき姿として、これから先に子々孫々に伝えていく形を一つのあり方にしていくという視点も必要。【内田】

### <<屋久島が日本・世界に果たす役割・機能>>

(日本・世界の見本となる)

- 日本最初の世界自然遺産である屋久島だからこそ、見本となる自然と人との付き合い方ができるのではないかと。【大山】
- 屋久島の山は近代技術をもって解決できるほど甘い環境ではない。こうした場所では「心(畏敬)をもって取り組むような対応が重要。このような取り組みを世界に発信した方



が、長期的には価値が上がる。【柴崎】

- 屋久島だからできることの一つとして、新たな山の文化みたいなものを屋久島から発信できるのではないか。屋久島に貢献できるようなことなら、その意味をキチンと伝えれば携帯トイレのような多少の不便があってもすばらしい体験の一つとして受け入れられるのではないか【柴崎】
- これまでの欧米のスタイルの体験の質、満足を越えた何かをこちら側から発信することで、屋久島の価値を長期的には高めることになる。そのバックグラウンドとして観光客、登山者が屋久島から誕生するかもしれない新たな価値をささえてくれるのかもしれない【柴崎】

(環境学習の道場)

- 環境文化村構想では、屋久島環境文化村を「環境学習の道場」という位置づけで考えていた。屋久島は環境学習の道場になりうる内容と条件を持っているので、このように考えれば、ある程度利用の仕方が見えてくるのではないか。【大山】
- ガイドは、屋久島の魅力を伝え、環境学習の指導者にもなりうる。【大山】
- 環境学習を行う場であるべき
- 屋久島の山には教育的な価値が多分にある。例えば、し尿担ぎは環境に配慮した行為であることとして捉える利用者は多いと考える。し尿担ぎのボランティアを募れば、島外から参加者が出てくると思われる。【柴崎】

(自然・アウトドア志向への入口)

- 素人がきて、その人たちが自然(アウトドア)を好きになって帰って行ってほしい。

<<屋久島の魅力・評価点と管理運営体制>>

- 屋久島は、自然そのものの価値と、人と自然とが関わってきたことが評価されてしかるべき。それに見合った管理・運営の体制が整えられることが理想。【日下田】
- 行政は屋久島ならではの風習や制度を「屋久島のモノサシ」として、国内や国外に普及できるのであれば、特区を申請したり、新たな法律を制定するなどして(管理や運営を)動かしていく断固たる決意を持ってほしい。【柴崎】

<<山岳部や登山以外の魅力の向上・発信>>

(山岳部以外の魅力の向上)

- 世界遺産登録エリアは山岳部にあるが、今後は、団塊世代以降の体力低下などで山頂まで行かない利用も出てくることが考えられる。里巡りツアーなどで屋久島の魅力を高めていく必要。【吉田】

(多様な魅力の発信)

- また、縄文杉登山者があまりじっくり見ていない、過去の林業など人と森との関わりなども魅力になっていくと思われ、自然だけでない多様な魅力を伝えていくべき。【吉田】
- 荒川登山口から大株歩道入口までの軌道は、し尿搬出やけが人緊急搬出に利用されてきた貴重な存在であり、林業が発展した産物。そうした林業的価値と景観的価値が併存してきた【柴崎】
- 屋久島の魅力が色々なところで外に向かっていっているということについては、地元の人間として誇れる部分【泊】

### 3. 利用者へのサービスについて

#### 3. (3) 利用施設の整備と維持管理 に関する意見

<<山岳部利用の原則>>

- 「徒歩利用を」大原則とするという記述に関して、屋久島山岳部は質の高い自然体験を提供する場なのだということをまず大前提として、その上で質の高さというものを具現化する利用方法として今後も継続して「徒歩利用」を位置づけるべき【吉田】

・利用者の多寡やルート難易度による登山道等整備の考え方について

<<登山道整備の考え方>>

(荒廃箇所への目処対処と長期的な管理)

- 人の利用を制限しても浸食は進んで行くと思う。早急な対処をしたうえで、どのレベルの利用をしていくかというゾーニングを検討していく必要がある【吉田】
- 平成29年に入ってから台風被害もあって、ここ数年でかなりの荒廃が進んでいる。これは長期的な登山道管理の指針の必要性と同時に、早急な措置が必要ではないか【土屋】

(屋久島の施策・対策)

- これまでの対応は全てなし崩し的に行われたことに対する場当たりの対応しかされてこなかったというのが正直な感想。結果的にそれ(トイレ等の施設整備)でどんどんお客さんが増えるという現象があり、維持管理費が膨大に増えてくることになる。それにどうやって対応するかを今考えなければいけない時期にきている【柴崎】
- 山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではないかと。屋久島の山奥に関してはトイレの話や施設整備の話は覚悟を決めて、やるしかない時代にきているのではと思う【柴崎】
- 科学技術だけでとても対応できる山ではないというのが正直な感想。ローテクでできる限りのことをやっていくという案が結果的には長期的にはローコストにもつながるのではないかと【柴崎】

- 現在のトイレをすぐ壊せということではなく、新設はしないとかそれが使えなくなったから必然的に携帯トイレに移行するという覚悟を決めるくらいがよいのではないか。縄文杉ルートだから無理なのではなく、むしろ日帰りの方がやりやすい点もある【柴崎】

#### (登山道整備の考え方)

- 利用者の多寡やルート難易度だけではなく、屋久島の場合は「道の迷いやすさ」という指標もあるのではないか。そういったものも含めて難易度を決めていくべき【吉田】

#### (ゾーニングの必要性)

- 利用や保全の水準というのは昨日、一昨日のコースの中でも様々であった。全てを一律で考えるのではなく、それぞれのところに応じた水準というものを設定していくべき【土屋】
- ゾーニングするとき、実際の管理の話になると、行政4者、民間の方々が様々な形で関わっている。この国立公園や世界遺産地域を考えると、行政4者、さらにもっと広げた関係者の協議をかなり密接に色々なレベルでやっていかなければならない【土屋】
- 荒廃箇所の早急な対処が終わった後で、一体どのレベルの利用をしていくかというのはしっかり検討した上でゾーニングして検討していく必要【吉田】
- 全体の来島者数と奥岳への入り込み者数というのもかなり関係あるなということを感じた。それは今後のゾーニングを考えていく上でも非常に大事な要素【吉田】
- こういった形で色々な人が入ってくると、地元の人との意識の違いは私も感じる部分がある。ある程度山の中の登山道で、制限というか、気軽に行けるところと、それなりの技量を持った人が行くべき所という整理が今後必要【泊】

#### (ROSについて)

- 重要なのは屋久島なりのROSをやっているということ。合意に基づいてそれぞれの地域でやってもらいたい【土屋】。
- 人々とのかかわりが深く、聖地、森林軌道、林業とのかかわりのある屋久島では、ROSに文化的な手法であるCOS (Cultural Opportunity Spectrum) とを組み合わせながら整備を考えていったらいいのではないか【柴崎】
- 日本ではROS的な発想で管理されてこなくて、大人数での利用に供する形で観光開発、国立公園、世界遺産地域の施設整備が行われてきた傾向がある。その結果、保護地域の一番核心の部分だからこそ、施設整備がされている現状が起きている。それゆえに過剰利用の問題がある。そういった不整合の状態を変えていく、1つの考え方としてROSが参考になるのではないか【柴崎】
- ROSのままに厳密にやると、いろいろ問題がでてくるが、その方向に近づけていこうという発想は大事【柴崎】

- ROS の考え方は、具体的な管理手法を考える上で非常によいと思う【日下田・中川】

(ROSでの整備区域、レクリエーションの森)

- レク森については、一番利用の初歩的な方でも利用できる場所として非常に重要であり、全体的な位置づけでもはっきり色分けをつけて整備していくことが重要【土屋】
- 屋久島には「どうぞ国民の皆様来てください、レクリエーションを楽しんでください」というレクリエーションの森が5箇所設けられている(ヤクスギランド、白谷雲水峡、大川の滝、千尋の滝、田代浜)。そういったところは可能な限り誰でも行けるように、バリアフリーで体の不自由な方も来て頂けるように整備するという必要も考えている。【川畑】
- ヤクスギランドはコア地域という位置づけとし、縄文杉まで行かなくても十分に楽しめる場所、多くの人を受け入れる場所という考え方を伝える。【柴崎】

(ROSでの原生区域、花山歩道・マイナールート)

- 花山歩道の魅力は原生性であり、それを確実に保ちつつ利用を進めることが重要。利用をコントロールし、制限の中で利用を進めていく仕組みを作ることが非常に重要【土屋】
- 花山歩道、永田歩道は1990年代と比較すると、原始的ではあるのだが、非常に歩きやすく、明るいという印象をもった【柴崎】
- マイナールートでビバークが必要になる場合もある。このため、マイナールートに行く人は事前レクチャーの受講、ガイド同伴、携帯トイレ利用することを設けてもいいのではないかと【古賀】

#### ・登山道浸食、踏圧による裸地化、避難小屋等の老朽化への対応について

##### <<登山道荒廃等の現状>>

(荒廃箇所への早急な対処)

- 登山道の荒廃がひどい。長期的な登山道管理の指針の必要性と同時に、早急な措置が必要。ここまで荒廃が進んだら、修復を必ず始めるというような整備をするときの基準のポイントを予め設定すること、場所ごとに設定することも必要【土屋】
- 永田岳、翁岳に降りる辺りについては、非常に深掘れしている状況。修復措置をとらない限り、人の利用を制限したとしても自動的にどんどん掘れていってしまうというのは今後も続く。早急な対処が必要【吉田】
- 1990年代は、焼野三叉路から永田岳までの荒廃は今ほどに広がっていなかったような印象がある。奥岳地域はちょっとしたことで環境が激変する場所であると痛感した【柴崎】

(軽微な補修では対応できない施設の老朽化)

- 平成9年の縄文ルートの木道整備がされてから約20年が経過している。木造物なので、

軽微を越える補修ではないと対応できない場所も多々ある【伊熊】

#### (最低限の整備の必要性)

- 当たり前のことが現状できていない。協力金については集金データを把握している。それをつかって整備すればいいのではなくて、管理するのは誰なのか、そこはしっかりと考えてもらいたい。何に対しても協力金を使うものではない【伊熊】
- 淀川登山口の協力金徴収での登山者の感想として、最低限の整備ができていないと苦言を言われている。携帯トイレブース扉開閉、石塚小屋トイレドア開閉、石塚小屋・高塚小屋・鹿之沢小屋・淀川小屋は雨漏り。最低限の整備が必要【古賀】
- 施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより作業部会が必要【土屋】

#### (施設管理者の予算確保と環境保全協力金)

- 施設は管理者が予算をつけて維持管理していくのが原則だが、最低限のところできていない状況。そういう中で協力金をいただいているというところが非常に辛い。最低限の修理ができていなかったら、納得してもらえない。これは管理者のそれぞれの主体が、早急にやってもらった上でそれでもだめだったら協力金を使ってでも、他の主体の所につかっても緊急にやらないとならない。お金を払ったのに、最低限の事もやってくれないと投書が新聞に載ったら、協力金制度自体が批判を浴びてだめになってしまう【吉田】

#### (花山歩道の現状)

- 花山広場を越えた先は崩れのひどい場所があったが、1990年代当時にはなかったと記憶している。原生的な場所でも、侵食等の変化が起き始めているような気がした【柴崎】

#### (管理者間の連携)

- パトロールの情報交換は実はあまりできておらず、どこが壊れているとかそういう情報交換がまだできていない状況【古賀】

#### ・公園計画上の位置づけがないルートへの取り扱いについて

- 地元の人だけが知っている秘密の場所が、だんだんと知られていき、ガイドの利用もされて、人数も増えて行って、結果的に施設も整備されていった。あれを繰り返すと、どこかでそれを覚悟して止めて行かないと、際限なくやってしまうとリスクも高まる【柴崎】
- 観光利用を進めていってしまうと、太鼓岩だけでなく、高盤岳も今では案内されてい

る。石塚山も行く人が増えている。だんだん屋久島の知られてなかった部分が、どんどん知られていく方向になっていく。それは屋久島の魅力を伝えることなのか、むしろ消費して使い捨てしているのではないか。どこかで情報の制限が必要【柴崎】

#### ・山岳トイレのし尿処理と携帯トイレについて

(検討会の役割について)

- より具体的な話しは山岳部保全利用協議会で行い、この検討会では将来的な方向性やビジョンについてすり合わせ、関係者の意見を聞きながら少し前に進む方向で考えていくというのがこの検討会の役割だと思う【土屋】

(検討の進め方について)

- トイレ整備の仕方も、山頂まで行くつもりがない、そのぐらいの気持ちの人にまで携帯トイレを使ってくださいとするのか。あるいはそこが最後のトイレなのでそこから先は携帯トイレになるとするのか。淀川小屋が世界遺産地域の入り口のぎりぎりのところということもあるため今後の検討課題【吉田】
- トイレの問題については、これは色々な議論が出てくるかもしれないが、質の高い自然体験というものにトイレがどう関係してくるかということになる。質の高い自然体験では、豪華なトイレをつけるのは質の高いという意味にはならないと思う【吉田】
- バイオトイレに移行できるのであればそちらのほうにしていくという方がふさわしい。但し、汲み取り式トイレを全てバイオトイレに代えれば解決するというのではなく、場合によっては汲み取り式トイレもなくしてしまっただけで全部携帯トイレにしてしまうことも質の高い自然体験になると思う。

屋久島ではこのように決めて、山の環境を悪くしないためにも、あるいは山小屋の周辺で悪臭がするような状況、汲み取り式トイレの染み出しの問題等で水環境に影響を与えないためにも、携帯トイレのボックスを設置しているのだと、みんなが覚悟して入山するということが質の高い自然体験になり得る。そこはきちんと考えていかないとけない【吉田】

- 携帯トイレというのは実際使って、登山口まで下ろした後は島の中でどのように処理されているのかまで考えてもらいたい。トイレというのが最終的に屋久島で里までいってどうなるのかまで考えていただくと面白いのではない【古賀】
- 山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではない【柴崎】
- 山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではない【柴崎】
- 山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではない【柴崎】
- 科学技術だけでとても対応できる山ではないというのが正直な感想。ローテクでできる限りのことをやっていくという案が結果的には長期的にはローコストにもつながるのではない【柴崎】

- 現在のトイレをすぐ壊せということではなく、新設はしないとかそれが使えなくなったから必然的に携帯トイレに移行するという覚悟を決めるくらいがよいのではないか。縄文杉ルートだから無理なのではなく、むしろ日帰りの方がやりやすい点もある【柴崎】
- 方向性をしっかり出すというが大事【土屋】
- 携帯トイレだけ推進すると言うのではなく、今後議論するゾーニングの中でどういった方向がふさわしいのか検討してふさわしい方向にもっていくことが必要【吉田】
- 覚悟をもって山に入るところは携帯トイレ中心となる等の議論はしてもいいと思う。きちんと議論して、どのようにしていくのかを決めたほうがいい。今のような汲み取り式トイレの状況を「仕方ないと」言っているのは時代遅れで「質の高い自然体験の提供」を議論している場にはなじまない【吉田】
- トイレについては難しい問題、大きなテーマなので、専門部会が必要【中川】

(これまでの対応について)

- これまでの対応は全てなし崩し的に行われたことに対する場当たりの対応しかされてこなかったというのが正直な感想。全面携帯トイレは極論だという意見があったが、トイレがあれば山に整備されてきた状況が、逆に極論のやり方をしてきたのではないか。結果的にそれ（トイレ等の施設整備）でどんどんお客さんが増えるという現象があり、維持管理費が膨大に増えてくることになる。それにどうやって対応するかを今考えなければいけない時期にきている【柴崎】
- 現状を行政がどう捉えてどういう方向で進もうとしているのかが明らかになっていない【大山】

(汲み取りトイレの現状について)

- 汲み取り式トイレの周りに汲み取りの柄杓とかバケツが横に置いてあるのがすごく目に付く状況にあるというのは、質の高い自然体験をする場所としてはあまり適切ではない。汲み取り式トイレであっても、ああいうものが目に付くような形で置いてあるという状況はなくしていかなければならない【吉田】
- 汲み取り式トイレは衛生面、悪臭、トイレ内が暗いことからや恐ろしさがある【土屋、吉田】
- 夏場の汲み取り式トイレにはハエもいてなかなか利用できない。あれを利用するには本当に勇気がいる。そういう環境が果たしていいのかどうか色々な問題がある。今後の方向性を持っているのかその辺が全然これまで示されていない。【大山】
- 今のような汲み取り式トイレの状況を「仕方ないと」言っているのは時代遅れで「質の高い自然体験の提供」を議論している場にはなじまない【吉田】

(携帯トイレの推進について)



- 携帯トイレを持ってはいるけれどもなかなか使う人が少ないというハードルをどう越えるかというのが一つあると思う。また、山岳部では携帯トイレの推進ということは今後もしやっけていかなければならない【吉田】
- 携帯トイレについては、最初のきっかけさえ越えれば結構使えるものだと思う。デザイン性、利用性についてはもう少し改善して一般の方にも受け入れやすいような工夫をしていけばよいのではない【柴崎】
- 小屋型の携帯トイレは衛生面で非常にきれいだった。汲み取り式トイレは衛生面、においや恐ろしさがあるが、少しコストがかかるけれども設備として水準の高い携帯トイレを普及していくことがひとつ重要なのではない【土屋】
- 携帯トイレに関して、こういった会議でいつも出るのが全部携帯トイレにしたらどうかという話。それは極論なので、自分たちの立場からするとそれは難しい。それぞれのルートごとに考えてもらえると助かる。全部という意見だとなかなか前に進まないと思う。まずできる対策というのを話して頂きたい【古賀】
- 全てのお客さんにマナー・モラルを守ってもらえる環境にもっていけるのか疑問なところはある。0か100の話ではなく上手に併用していくことを考えることが大事ではないか【伊熊】
- 事前に携帯トイレ利用についての情報がないのと、あるのとでは大分変わってくる。ハード面とソフト面の両輪が重要かと思う。【加藤】

### 3. (5) 安全 に関する意見

- ・自己責任と施設等管理者がすべきことについて

#### ☆自己責任について

- 人数制限しないためには、ピンクテープを設置しない、ヤブコギしないといけないようにするという方法もある【柴崎】

#### ☆施設等管理者がすべきことについて

(最低限の整備の実施と環境保全協力金)

- 当たり前のことが現状できていない。協力金については集金データを把握している。それをつかって整備すればいいのではなくて、管理するのは誰なのか、そこはしっかりと考えてもらいたい。何に対しても協力金を使うものではない【伊熊】
- 淀川登山口の協力金徴収での登山者の感想として、最低限の整備ができていないと苦言を言われている。携帯トイレブース扉開閉、石塚小屋トイレドア開閉、石塚小屋・高塚小屋・鹿之沢小屋・淀川小屋は雨漏り。最低限の整備が必要【古賀】
- 施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより作業部会が必要【土屋】

(施設管理者の予算確保と環境保全協力金)

- 施設は管理者が予算をつけて維持管理していくのが原則だが、最低限のところがない状況。そういう中で協力金をいただいているところが非常につらい。最低限の修理ができていなかったら、納得してもらえない。これは管理者のそれぞれの主体が、早急にやってもらった上でそれでもだめだったら協力金を使ってでも、他の主体の所につかっても緊急にやらないとならない。お金を払ったのに、最低限の事もやってくれないと投書が新聞に載ったら、協力金制度自体が批判を浴びてだめになってしまう【吉田】

(管理者間の連携)

- パトロールの情報交換は実はあまりできておらず、どこが壊れているとかそういう情報交換がまだできていない状況【古賀】
- 施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより作業部会が必要【土屋】